

28 田中彌性園蔵・オランダ外科三訳書の

知見

田中 祐 尾

はじめに田中彌性園蔵書中、十八世紀初頭のオランダ外科翻訳書三部についてその概略をとくに檜林鎮山著『紅夷外科宗伝』の彩色絵図の特徴や、伊良子光顕著『外科訓蒙圖彙』における『臍志』からの影響などについて触れる。西玄哲の『金瘡跌撲療治之書』は紅夷外科宗伝に包括されている。

つぎに十七世紀以降、インドと東南アジアとくに香料群島において香料の利権をめぐって西・葡・蘭により死闘の歴史が繰り広げられたが、ここではその標的となった象徴的香料の四種類について、これらの医書での扱いを述べる。

一六〇二年東南アジアからポルトガルの勢力を駆逐して東インド会社を設立したオランダにとって、この地方での最優先課題は、マラベルの胡椒(ペッパー)・肉桂(シ

ナモン)・モルツカの丁香(クローブ)・バンダの肉豆蔻(ナツメグ)などといった香料の略奪貿易であった。

これより数百年以前、アラビア商人によりこれらの香料はいったん主にマラツカに集められたのち、一部がシルクロードを経て東方を目指し唐帝国経由で日本に着き、現在も正倉院の目録に収まっている。

すなわち十七世紀に直接オランダ人がもたらしたこれらの品物は、日本にとっては古くから医書に頻繁に記されていた既知の薬品であった。

我が国の本草学者にとって薬効としてのこれらの成分にはさほどの新味はなく、防腐剤としてであれば在来の生姜(ジンゲロン)・唐辛子(カプサイシン)といったものの方が手っ取り早い存在であったし、この後渡来したキナやサフランそしてペラドンナといった薬物の神秘的効力の方がはるかに魅力的であった。

ヨーロッパにおける狩猟または牧畜民族の肉食生活でのこれら香辛料の必要性和その香りと味、さらには獣肉への相性や風味といったものへの渴望にも近い感受性は、到底この時代の日本人の理解のほかであった。

彌性園藏書中、明朝嘉靖十八年刊『袖珍方大全』に載るこれら四種の香辛料と、同じく文化六年刊『外科訓蒙圖彙』のそれとを対比すると、前者は内服薬、後者は外用薬として使われていることが解る。

今一つ、司馬遼太郎に拠ると、ポルトガルが長崎においてもたらしたアルメイダらによるミゼリコルディア（慈恵院）の南蛮医学のうち、外科における唯一の功績が、蒸留酒による傷口の消毒法であるという。宝永三年刊『紅夷外科宗伝』をたどり焼酒による外傷の入念な洗浄法の記載を追う。

薩摩と肥前にポルトガルの宣教師が上陸し医療を行ったその時、その地に良質の焼酎という蒸留酒が存在したという偶然の一致が、無数の敗血症を救ったと推定が可能である。

（大阪市立大学医学部）